

未来への伝承

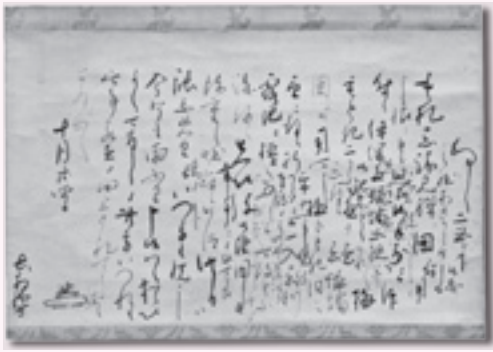
100

殿さまの収集品

瀬戸茶入 銘「塩屋」

はじめに手紙をご紹介します。しょう。書き手は土浦藩土屋家2代藩主土屋政直(1641~1722)です。

「梅もどきとろうそくをお贈りくださり、ありがとう。梅もどきはさつそく露地に植えさせます。こんど夜話の茶事を開きますので出かけください」



土屋政直の手紙

露地とは茶室に続く庭のこと、また、夜話とは冬至から立春までの期間、夕暮れ時から催す夜の茶会です。露地には行灯をともし、客を迎える時に手燭を用います。掛軸は用いず、花は白がよいとされるなど決まりごとも多く、わずかな照明をたよりにすめなければならぬので、茶会の中でもっとも難しいものとされています。

贈り物に即して夜話を催すとは、政直の技量もさることながら、相手も政直が茶の湯にたくみなことをよく知っていて、まさに以心伝心の知友だったようですが、残念ながらこの宛名は手紙から欠けてしまっていてわかりません。

この手紙は政直が茶の湯をたいそう好み、熟練していたことを伝えています。江戸時代の將軍や大名がみな茶の湯を好んでいたとは限りません。質実剛健を旨とした徳川

家康はあまり茶の湯が好きではなかったようです。綱吉は能を好み、途絶えていた演目を復活させていますし、相撲や将棋などに執着した大名もあり、嗜好や趣味は人それぞれです。

では、政直はなぜ茶の湯を好んだのでしょうか。はつきりした理由はわかっていませんが、政直の父数直(1608~1679)の影響が大きかったのではないかと考えられます。数直は武家茶道を牽引した小堀遠州(1579~1647)の弟子で、遠州が亡くなった際には形見として雪舟の絵をもらっています。家光の茶頭をつとめ、古典に明るく建築にも精通していた遠州のことを父から聞き、遠州に對して強いあこがれを抱いたのではないかと思われます。

その証拠が土屋蔵帳にはつきり現れています。土屋蔵帳とは土屋家が所蔵していた茶

道具の目録です。実は骨董や古美術の業界では今も昔も土屋蔵帳は有名です。なぜなら、遠州が茶道具としてよいとしたものが満載されているからです。たとえば、土屋蔵帳の350点余りの道具のうち、茶入は65点含まれています。濃茶を入れて茶席に出す焼物の小壺を茶入といいますが、普通の大名が持つ数としては例を見ない多さである上、その多くが遠州が好ましい茶道具として、世の中に送り出した国産陶器です。政直は遠州ゆかりの道具を熱心に集めました。

瀬戸茶入 銘「塩屋」は、土屋蔵帳記載の65点のうちのひとつです。古歌を引用して道具に銘をつけることが多かった遠州ですが、「塩屋」が和歌を引用したものかどうか、はつきりしていません。「塩屋」は釉薬の一部が明るく発色しています。これを塩を焼



瀬戸茶入 銘「塩屋」

く苦屋の炎の色に見立てたのかもしれない、というのは想像ですが、遠州好みであることは、その形から間違いないと思います。「塩屋」の底部には面取がほどこされていて、形がすっきりみえるからでしょう。遠州は面取の茶碗や茶入を作らせ、所蔵していました。「塩屋」も胴部と底部がはつきり分けられ、蔵帳でも「面取手」と表記されています。「塩屋」は、遠州にあらがれた政直の姿をその形からも伝えてくれる茶入です。

この茶入は6月下旬まで市立博物館展示室1に展示しています。また、「土屋政直―土浦藩主の横顔―展」を5月6日まで開催しています。

岡市立博物館(☎824・2928)